

憧れを追い求め、
情熱のままに
ヴァイオラの世界を切り拓く

ゲスト◎ヴァイオラ奏者、上野学園大学・ジュネーブ音楽院・
アムステルダム音楽院・クロンベルク・アカデミー教授

今井 信子氏

“芸術に奉仕する心”と
“音楽への憧れ”を育んだ学生時代

——楽器との出会いとプロの音楽家を目指そうと思われたきっかけを教えてください。

戦後の混乱期を体験した母が手に職をつけさせようと、小学校入学と同時にヴァイオリンを習い始めました。自分の意思もなく小さな楽器をあてがわれた私は、

当時厳しくて退屈な練習が嫌で仕方ありませんでした。辞めなかったのは母に反抗できるほど気が強くなっただけ(笑)。でも後に、この時期に身につけた音楽の基礎教育がいかに大切だったかを実感し、今では母にとっても感謝しています。

高校は桐朋学園音楽科に進み、自由な校風のもと齋藤秀雄先生(※1)の指導を受けました。大変厳しい方でしたが、「音楽家は自分のためではなく、音楽という

※1 齋藤秀雄(1902～1974) 東京都出身の日本のチェロ奏者、指揮者、音楽教育者として活躍した音楽家。戦後の日本のクラシック音楽界に教育者として大きな功績を残した。1948年には井口基成、伊藤武雄、吉田秀和らと「子どものための音楽教室」を開設。小澤征爾はその第1期生。「教室」は後の桐朋学園の一連の音楽系学科開設につながった。1952年には桐朋女子高校音楽科主任、1961年から1972年まで桐朋学園大学教授を歴任。没後、教え子が主体となってサイトウ・キネン・オーケストラやサイトウ・キネン・フェスティバル松本が創設される。



カザルス音楽祭にて、カメラを構えているのが今井さん、右がカザルス



フェルメール・クアルテットの練習風景

芸術に奉仕する、仕える気持ちを持たなければならない」という先生の教えは、私にとって音楽家としての倫理の根幹をなす考え方になりました。桐朋学園では素晴らしい友人にも恵まれて室内楽に夢中になりましたが、プロの音楽家になろうと真剣に考え始めたのは3年生のときです。オーケストラの授業中に外国人の先生から、「この音は濃いグリーンで、ここからは若草色のイメージで」と曲想の変化を説明された瞬間、音と色のイメージが重なって衝撃を受け、そこから少しずつうれしさや悲しさなどの感情をイメージとして音楽に結び付けることができるようになりました。私がこれまで音楽家としてやってこられたのも、このイメージの力のおかげだと思います。また、桐朋学園時代に焦れるように感じた、この曲を弾きたい、室内楽をやりたい、この人に師事したいという「憧れ」とも言えるエネルギーが現在でも私の活動の原動力となっています。

世界での武者修行を経て プロのヴィオラ奏者へ

—— ヴィオラ奏者へ轉身された経緯についてお聞かせください。

ヴィオラに初めて触れたのは授業でした。ヴァイオリンを学ぶ上でヴィオラは必修カリキュラムなのですが、当時は専門の先生もおらず、学校にあるヴィオラもベニヤ板に弦を張ったような粗末な楽器でした。その代わりに好きなように弾けて、未知の世界を探るような楽しさがありました。でも当時、ヴィオラは存在感が薄く日本にはソリスト(ソロの演奏者)さえいなかったの、ヴィオラを専門とすることは考えませんでした。

プロフィール●いまい・のぶこ

東京都生まれ。桐朋学園大学卒業後、イェール大学、ジュリアード音楽院を経て、1967年ミュンヘン国際コンクール、68年ジュネーブ国際コンクールで最高位入賞。70年西ドイツ音楽功労賞を受賞。以後、室内楽、ソリストとして世界各地で活動を行う一方、教育者として後進の育成にも力を注ぐ。発表したCDは50枚以上。彼女自身のために書かれた曲や世界初演の曲も多く、武満徹がフランス革命200周年を記念して作曲した「A String Around Autumn」を、89年に小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラと共演した際のCDはベストセラーとなっている。また、「ヴィオラスペース」などヴィオラに関する数々の企画・プロデュースを展開。今年2009年には世界初の「国際ヴィオラコンクール」を開催予定。93年エイボン女性芸術賞、文化庁芸術選奨文部大臣賞、94年京都音楽賞、95年モービル音楽賞、96年毎日芸術賞、サントリー音楽賞受賞。2003年4月紫綬褒章受章。現在スイス在住。著書に「憧れ」(春秋社)。

人生が変わったのは、桐朋学園大学オーケストラのコンサートツアーでアメリカに行った4年生のときです。ツアー後も数人の友人とそのままアメリカに残り、タングルウッド音楽祭で開かれるオープンレッジに参加しました。ある日、友人と芝生に寝転がってボストン交響楽団の「ドン・キホーテ」を聴いていると、急に、今まで聴いたことのない甘くて豊かな音が聴こえてきて跳ね起きました。その楽器こそヴィオラだったのです。まさに「ヴィオラにつかまった」瞬間でした。「こんな音が出せるなら、私は絶対にヴィオラ奏者になる!」と思い、その強い憧れから何の迷いもなく、誰にも相談せずにヴィオラに転向することを決意しました。

翌年、ヴィオラを本格的に学ぶため、アメリカのイェール大学大学院に留学しました。当初は言葉も通じず異文化にも慣れず、毎日が孤独との戦いでしたが、おかげで自立する強さが身に付いたと思います。そして1年ほど過ぎて留学生活にも慣れたころ、力試しのつもりで出た小さなコンクールで初めて賞金をもらい、そのお金で、66年にプエルトリコで行われた「第10回カザルス音楽祭」へ行きました。そこで演奏していたオーケストラのヴィオラ奏者に思い切って「レッスンを受けたい」と声をかけると、意外にも温かく応じてくれ、一流の演奏家たちを紹介されて、彼らのアドバイスを機にジュリアード音楽院への転学、室内楽のメッカと言われる「マールボロ・ミュージックスクール&フェスティバル」への参加、ミュンヘン国際コンクール、ジュネーブ国際コンクールでの最高位入賞と、次々と道が開けていきました。

その後も思い立ったらすぐに飛び込むという、道場破りのような武者修業が続きましたが、実力主義の音



紀尾井ホールで行われた「ヴィオラスペース2007」で演奏する今井氏

楽の世界では、本人の力とやる気が本物であれば必ず誰かが見ている手を差し伸べてくれます。この“放浪の日々”で経験した多くの出会いは、その後の私にとって大切な財産となりました。

楽しさと感動の瞬間を追い求め、 新たな領域に挑戦

—— 著書の中で、「弦楽器奏者にとってカルテットは最後に行き着く境地」と言われていますが、1973年にメンバーとなった「フェルメール・カルテット」(※2)の経験はどのようなものだったのですか。

カルテット(弦楽四重奏)は室内楽の一つですが、ほかの室内楽と異なり、メンバーが基本的に固定されているため、各自の微妙な音程の取り方で四重奏の響きの色合いが変わってしまうのが大きな特徴です。互いのエネルギーが顔の表情や目の動き、息遣い、身体の動きを通して放たれるため、演奏者同士のコンタクトはフィジカル(身体的)であり、また、練習時は最高の

音を作り出すためにそれぞれが一番だと思う演奏や考えをぶつけ合い、すり合わせていくバトルが展開されます。「カルテットに所属するのは、カルテットと結婚するようなもの」とよく言われるのもこのためです。でもそのおかげで言葉にはすっかり困らなくなりましたね(笑)。フェルメールでは互いを支え合い、補い合うことを学び、一人では決して到達できない感動を得ることができました。その後、3歳になった息子との安定した生活を考え、必要なときには自分の意思でソロや室内楽と柔軟に仕事のスケジュールを調整できるようカルテットを退団しましたが、フェルメールに在籍した5年間は何物にも代えがたい貴重な経験となりました。

—— ヴィオラを演奏する上での楽しさ、また演奏時に一番大切にしていることは何ですか？

もともとヴィオラのために書かれた作品は少ないので、メインレパートリーだけではなくヴァイオリン用の古典作品を編曲して演奏しながら、ヴィオラの世界を広げる努力を続けてきました。ソリストとして活動するようになってからは、武満徹(※3)さんに書いていただいた楽曲をはじめ、数多くの新作を世界で初めて披露する機会にも恵まれましたが、ほかの人がやっていない領域に挑戦することは、新たな発見もあり、とても楽しいことでした。

演奏時に大切にしているのは、“最初の音=ファースト・ノート”。その音が出る前の一瞬と音の終わる一瞬で、その演奏の良し悪しが決まると言っても過言ではありません。音楽に触れていると、時折、肌にジビッとくるような音に出合うことがあり、その瞬間のことは、他人の演奏でも自分の出した音でもずっと忘れられないものです。私は音楽家としてその瞬間をいつも求めています。

覚悟を決めて突き進む

—— 音楽家、ヴィオラ奏者として次世代を担う若者に伝えたいメッセージは何でしょうか。

大切なことは憧れ、つまり今何が一番したいのか、今しかできないことは何なのかを見極め、それを決して諦めないことです。時間がかかっても好きなことをしたほうが結局自分のためになりますし、続けていればある日突然目の前が開けるものです。そのためには真摯な態度で常に150%の力を出す努力をしなければなりません。現在は少し手を伸ばせば何で

※2 フェルメール・カルテット 1969年マールボロ音楽祭で結成された、北イリノイ大学のレジデント・カルテット(学生を指導し、学内でも演奏して定期的な収入を得ることができる制度)。ヴァイオリン2本、ヴィオラ1本、チェロ1本で構成される。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲をすべて録音したのをはじめ、幅広いレパートリーを有する現代アメリカを代表するカルテットのの一つだが、2007年に惜しまれながら解散。

※3 武満徹(1930～1996)現代音楽の分野において世界的にその名を知られた日本を代表する作曲家。クラシックからジャズ、映画音楽までそのジャンルは多岐にわたり、作品数は膨大。1989年、フランス革命200周年記念祭にはヴィオラのための曲「A String Around Autumn」を作曲、今井氏が初演した。



ヴィオラスペースでの練習風景 Photo by Fumiaki Fujimoto



も手に入る時代ですが、私にあるのは音楽を弾きたい、伝えたいといった、突き動かされるような音楽そのものへの憧れだけです。

今の若い人たちは、私たちの時代と違って音楽会も多く、CDやインターネットを通じて情報や音楽も簡単に手に入りますが、何かに憧れ、自分から求めるという情熱が足りないような気がします。一生懸命練習していても、曲に対する理解が不足していたり、自分のどこがおかしいのかも気付かないようでは、「神聖な音楽」と真剣に向き合っていることにはなりません。うまく弾ければ良いということではなく、何かに向かって進もうとするエネルギーや、やっつけてうれしいという気持ち、何かを発見したときの喜びを感じてもらいたいですし、そんな若者の姿を見るのが私の喜びでもあります。

私は、「ノー・リスク、ノー・グロウリー（リスクなくして栄光なし）」という言葉が好きです。今しかできないことをやり、階段を一つ上がって高いところに行くためには覚悟を決めて進んでいくしかありません。リスクをリスクと思わず、それしかないと思ったら突き進む。私たち音楽家にとって最も大切なことは、音楽の偉大さを知り、音楽に奉仕すること。そして憧れを持ち続けることだと思っています。

ヴィオラについては、「ヴァイオリンとチェロの中間にあり、重要だが主役ではない、いぶし銀のような存在」と例えられることがあります。私にとってヴィオラの音はとてもセンシティブです。官能的で、肌で感じるものであり、身体の一部となって自分の言葉を語ってくれる楽器です。そんなヴィオラの魅力を少し

でも多くの人に知ってもらいたいですね。

—— 現在、毎年「ヴィオラスペース」を紀尾井ホールで開催されていますが、その思いをお聞かせください。

ヴィオラスペースは、1987年に設立された日本最初の室内楽専用ホール「カザルスホール」の音楽アドバイザーに就任したことがきっかけで始めました。91年に初めてのリサイタルを開いたところ大変な盛況で、その後、どんどん規模が大きくなり、若いヴィオラ奏者のための公開マスタークラスなども始まって、ヴィオラという楽器の可能性を追求する場となっていきました。2003年には場所を移す必要が生じたのですが、紀尾井ホールが快く引き受けてくれました。今ではヴィオラスペースにかかわる人も大変多く、若い人たちが新たな企画を提案するようになってきました。彼らから学ぶことや新鮮な発見も少なくありません。今度はどんな新しいことをやろうか、今までにない視点でやりたいと、とてもわくわくしています。

今年ヴィオラスペースで企画しているのは、「東京国際ヴィオラコンクール」(※4)です。ヴィオラ単独のコンクールは世界でも珍しい試みですが、いい企画に真剣に取り組んでいけば必ず人はついてくると信じています。今回もぜひ成功させたいですね。



東京国際ヴィオラコンクールのパンフレット

※4 東京国際ヴィオラコンクール

1992年、今井信子氏の提唱により「ヴィオラの礼賛」「優れたヴィオラ作品の紹介と新作発表」「若手の育成」の3つをコンセプトにスタートしたヴィオラのための祭典「ヴィオラスペース」((財)新日鉄文化財団共催)の一環として、今年5月に創設されるコンクール。ヴィオラの国際コンクールはドイツのミュンヘンやスイスのジュネーブの総合音楽コンクールで部門として存在するが、単独のコンクールは世界でも珍しくアジアでは初。優れたヴィオラ作品の紹介と新作発表、将来性のある優秀な若手の発掘、日本からの文化の海外発信などを掲げ、コンクールの審査だけでなく、ヴィオラスペースの流れを汲んだワークショップや審査委員、アドバイザー、入賞者によるコンサートを同時開催し、ヴィオラのあらゆる可能性を探求する。今後、3年に1度開催する予定で、第1回は紀尾井ホールで5月23日から31日まで行われる。